

コツラード・ヴィーニの公共彫刻

—— モンテカティーニ・テルメおよび

テルニの作例について

甲斐 教行

フィレンツェ出身の彫刻家コッラード・ヴィーニ（一八八八—一九五六年）は、一九二〇年代から五〇年代にかけてイタリア各地の公共彫刻を手がけた重要な作家であるが、戦後忘却され、その活動の全体像を捉えたモノグラフ的研究は現在まで出版されていない。執筆者はヴィーニの公共彫刻のカタログ作成作業を進めており、そのうち北イタリア、アルト・アディジェ州ボルツァーノの全国社会保障機構会館ファサード浮彫《統帥讃歌》（一九三五—三七年）、中部イタリア、ラツィオ州サバウディアのサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂内に安置される大理石像《われは主のはしため》（一九三五年）、南イタリア、シチリア州ラグーサ郵政電信庁舎ファサード上を飾る九体の擬人像（一九三二年）について、これまでに完成作と個人蔵習作との関連を明らかにし、画像上の検討を行うなど、個別の研究成果を公刊してきた。<sup>(1)</sup>今回は、中部イタリア、トスカーナ州モンテカティーニ・テルメのテットウッチョ浴場ファサード上にある四体の擬人像と、ウンブリア州テルニ大聖堂ファサード上の八体の聖人像を中心に、同様の検討を試みる。

### 一、モンテカティーニ・テルメの擬人像

トスカーナ州モンテカティーニ・テルメの温泉の効能は古代ローマ時代から知られていたが、一三七〇年に水源のひとつが屋根（*tettoia*）で覆われたことから、この浴場はテットウッチョ（*Tettuccio*）の名で呼ばれるようになった。一五八三年以後のメディチ家管理下では温泉場に大きな発展はなかったが、一七三—一八二二年にロレーヌ家のトス

カーナ大公ペーター・レオポルドによって本格的な開発が進められ、多くの施設が再建・新設される中、一七七九—一八一年にテットウッチョ浴場もニコロ・ガスペーロ・マリア・パオレッティの設計案により再建された。<sup>(2)</sup>イタリア統一後のモンテカティーニ・テルメは避暑客の増加により飛躍的に発展し、十九世紀末には「イタリア随一の水浴場」（*prima fra le stazioni balnearie d'Italia*）と評された。<sup>(3)</sup>一九一一年に同地の温泉場を保有していた「王立温泉社」（*Società Regie Terme*）と「新温泉社」（*Società Nuove Terme*）が合併して「王立新温泉経営社」（*Società Anonima Escente Le Regie e Le Nuove Terme*）となり、一九一四年一月にフィレンツェの建築家・技師ウーゴ・ジョヴァンノッツイ（一八七六—一九五七年）が同社技術課長（*Direttore dell'Ufficio tecnico*）となった。

ジョヴァンノッツイは一九一六年に温泉場の全施設の設計案と都市計画案を委ねられたが、<sup>(4)</sup>同年の設計案は第一次世界大戦のため実施されなかった。今日われわれが確認できるのは一九一八年に発表された修正案だが、ファサードのアーキトレーヴ上に四体の女性寓意像を配する計画がすでに見て取れる（図1<sup>(5)</sup>）。同様の構想は、一九二三年十月の『建築と装飾芸術』誌に掲載された設計案（図2）にも確認できる。<sup>(6)</sup>両計画にほぼ同一のかたちで提示された四体の彫刻の外観は、のちにフィレンツェの彫刻家コッラード・ヴィーニが実際に制作したカッラーラ大理石による彫像とは異なっている（図3）。テットウッチョ浴場は一九二二—二七年に建造され、一九二八年に公式に除幕された。ヴィーニの四体の彫像はテットウッチョ浴場が完成した一九二八年六月の『技術者』<sup>(リシエニエール)</sup>誌掲載の写真に現在と同じ順序で並んで

おり、これらが「一九三六年に追加された」とする従来の記述は誤りである。<sup>⑧</sup>

ヴィーニの女性寓意像は、テットウツチョ浴場入口の左右に配された計四本の円柱が支えるアーキトレーヴ上に一体ずつ立っている。その主題をめぐってはいくつかの混乱した消息が伝えられるが、除幕の翌年に出版されたモンテカティニー・テルメの案内書には「泉、葉、衛生、健康」という記載があり、二〇〇〇年に出版された同地の公式ガイド・ブックも、「左から、泉、葉、衛生、健康」とこれを踏襲する。<sup>⑨</sup>では具体的に彫像を観察してみよう。

まず向かって左端の女性像は、左胸の下の位置に両手で水瓶を持ち上げ、傾けて水を注ぐ姿で表されることから、古典的な《泉》の擬人像（図4-1、4-2）であることがわかる。本彫像に関しては、フィレンツェの個人邸（前著のラグーサ寓意像小論における個人邸B）に、《泉》の石膏習作（図4b）の全身像（133cm）が現存するが、屋外に置かれていたため頭部など傷みが激しい。この像にはさらに、第一構想と思われる習作の歴史的写真（図4c）が現存し、最終作よりも下方の腰の位置で水瓶を傾けている。

左から二番目の女性像は右手に小鉢をもち、左手で花のついた葉草を携えていることから《葉》の擬人像（図5-1、5-2）と考えられる。三番目の女性像（図6-1、6-2）は両手で銘帯をもつが、そこには何も記されていない。図像を決定づける要素に欠けているが、《衛生》にふさわしい擬人像は他に存在しない。

右端の女性像は花や果実の入った籐の籠を両手で支え持ち、頭髮にも果実が見て取れる。花や果実は伝統的に「豊饒」を示すモティー

フである。モンテカティニー・テルメの美術作品を概説した二〇〇一年の刊行物には、《豊饒の姿をとる健康》（図7-1、7-2）という呼称が見られ、本作の図像に適合する。本彫像に関しては、フィレンツェの個人邸（前著のラグーサ寓意像小論における個人邸A）に頭部と右の二の腕、両足先を欠いた《健康》の石膏習作（図7a）（31cm）が現存する。これとは別に、習作の歴史的写真（図7c）も現存している。

ここでヴィーニの制作活動における本作の位置づけについて一考する。一九一一年、ヴィーニが二二―二四歳頃に制作された初期の四点の仮面（図8）にはメダルド・ロッソ（図9）の影響が濃厚であるが、一九二五年以前に制作され、ローマの鉄道員職場クラブ（Dopolavoro ferroviario）劇場を飾っていた浮彫《ウエヌスの誕生》と《オルフェウスの死》（図10）（ともに逸失）にはすでにリペロ・アンドレオッティ（図11）の軽快なエトルスク的造形の影響を受けながらもより古典的志向の強い作風の成立が見て取れる。一九二八年に親友フランチェスコ・バリオーニの依頼で制作したバリオーニ・ホテル創設二十五周年記念メダル《ケレス》（図12）にも同様の傾向が見られる。モンテカティニーの寓意像はちょうどこの時期に当たる。ほっそりした優美な女性寓意像はヴィーニが好んだ造形タイプで、モンテカティニー・テルメはその最初の試みと言えよう。本作は、ヴィーニがメダルド・ロッソの影響を脱し古典的造形を採り入れた時期の作例であり、公共彫刻の初期の作例のひとつとして位置づけられる。

## 二、テルニ大聖堂の聖人像

コッラード・ヴィーニは、ウンブリア州テルニ大聖堂広場の聖堂と向かい合う壁に、噴水の機能を備えたトラヴァーティン製の男性群像《ネーラ河とヴェリーノ河》(図13)——この地方で交わる二つの河川の擬人像——を制作し、一九三五年に設置した<sup>14)</sup>。ヴェリーノ河はチッタレアーレ近郊のモンテ・ポツォーニを水源とし、景勝地として名高いマルモレ滝を形成しながらネーラ河へと合流する。ネーラ河はテヴェレ河の左の主要な支流で、水源はマルケ州マチェラータ県ヴァッリンフォンテだが、全長一六キロにわたり、ほぼ全体がウンブリア州を流れる。コッレスタツテで支流のヴェリーノ河と合流して水量を倍増させ、テルニへと流れ込んだ後、ナルニをかすめ、オルテでテヴェレ河に合流する。

ヴィーニの群像は、浅い壁龕に沿って設置された半円状の水盤(奥行き約110cm、横幅約170cm)に置かれている。《ヴェリーノ河》(図14-1)は右腕で水甕を支え、下方の《ネーラ河》のもつ鉢に水を注いでいる。段差をもつ岩塊の上に腰を下ろす《ネーラ河》(図14-2)は、右手で鉢を差し出し、《ヴェリーノ河》から水を受けるとともに、左膝の上に水甕を置き、左手で支えている。二つの丸彫り像は半裸で、《ヴェリーノ河》は背に外衣を羽織り、左膝と股間も布に覆われている。《ネーラ河》は右膝から股間にかけて布で覆われている。背後には樹木が生い茂り林を形成している。

この噴水群像と広場を隔てて反対側に聳えるのがテルニ大聖堂である。同聖堂は、一九一七年の中部イタリア地震で大きな損傷を被つ

た後、一九三五年から三七年にかけて、ガエタノ・コッポリの計画案に基づいて修復された。ファサード突出部の上方にはテラスが新設され、前述した《ネーラ河とヴェリーノ河》と平行してヴィーニが制作したテルニやウンブリア州に關わるトラヴァーティン製の聖人像計八体が、テラスの前方に設置された(図15)<sup>15)</sup>。八体の聖人像は、左から、《アッシジの聖フランチェスコ》、《聖ペレグリヌス》、《聖女アガペ》、《聖ウァレンティヌス》、《聖アナスタシウス》、《聖女ドンナーナ》、《聖プロクルス》、《聖ガブリエーレ・デッラドローラータ》である<sup>16)</sup>。一五三四年四月十二日の『メッサツジエーロ』紙によれば、切妻の頂点に聖母像を設置する計画も当初は存在し、この時点でヴィーニによる習作(図16)が準備されていたものの、この構想は実現しなかった。また資金不足のため、予定の八体のうち四点が先行して設置された<sup>17)</sup>。同年四月二十七日の新聞記事もこれを傍証し、四月二十二日に《聖女アガペ》、《聖ウァレンティヌス》、《聖アナスタシウス》、《聖ガブリエーレ・デッラドローラータ》の四点がまず除幕されたと伝え<sup>18)</sup>る。同日刊行の大聖堂修復記念刊行物に掲載された写真(図17)からは、左端の、現在《アッシジの聖フランチェスコ》が置かれる位置に《聖女アガペ》が、また中央の二体《聖ウァレンティヌス》と《聖アナスタシウス》、さらに右端の《聖ガブリエーレ・デッラドローラータ》が設置されたことがうかがわれる。今日八体の彫像を見ると、中央の《聖ウァレンティヌス》と《聖アナスタシウス》はそれぞれ外側を向き、また対応する位置にある《聖女アガペ》と《聖女ドンナーナ》がそれぞれ内側を向き、さらに端に近い左右二体ずつの聖人像がほぼ正面向きである点に、左右の対応を意識した配置が視られる。従つて

当初《聖女アガベ》を左端に置いた配置があくまでも暫定的なものであったことが推測される。すべての聖人像の台座上部の寸法は奥行き50cmである。また当初両端に置かれた《聖女アガベ》と《聖ガブリエレ・デッラッドロラータ》の台座上部の横幅が40cmであるのに対し、それ以外のすべての台座上部の横幅は46cmである。各聖人はファサードの円柱の位置に対応しているため、円柱が二本になる中央の二聖人《聖ウァレンティヌス》と《聖アナスタシウス》の台座下方の横幅は、他の台座下方の二倍となっている。

次に各彫像の図像について考察したい。主題として取り上げられている人物のうち、フランチェスコとガブリエレ・デッラッドロラータがそれぞれ十二〜十三世紀と十九世紀に活動した以外は、いずれも古代から初期中世の聖人で、その実在性についても諸説ある。しかし本稿では聖人の生涯の史実上の考証ではなく、<sup>(20)</sup>図像の由来となりうる想像を交えた伝承を重視する立場から、フランチェスコ・アンジェローニが一六四六年に著した『テルニの歴史』、およびロドヴィーコ・ヤコビツリが一六四七年に著した『ウンブリア聖人伝』を主に参照し、<sup>(21)</sup>習作と完成作の間の身振りやアトリビュートの相違にも留意しつつ、左から順に各主題を論じていく。またフィレンツェの二つの個人邸（個人邸A、B・前出）には、これらの彫像のための石膏習作が数点現存しており、それらとの構想上の相違点についても触れていく。

まず《アッシジの聖フランチェスコ》（図18）は、言うまでもなくフランチェスコ会（小さき兄弟会）の創設者であり、ウンブリア州アッシジの出身である。ヴィーニの彫像は左手で巨大な十字架を抱え、右手を胸に置き、両手の甲には聖痕が認められる。フランチェ

スコの修道衣をまとい、腰紐には同修道衣の特徴である三つの結び目が認められる。本作については習作の歴史的写真が現存し、一九三五年の年記とヴィーニの署名がある。<sup>(22)</sup>またおそらく同習作に基づき、一九五〇年代にジュゼッペ・ストウフレッサがテラコッタによる同聖人像（テルニ、サン・フランチェスコ聖堂）を制作した。<sup>(23)</sup>

《聖ペレグリヌス》（図19）は、ヤコビツリによればローマ出身だが、教皇聖シクストゥス一世によりフランスのオークセル司教に任命され、一三三三年頃に同地に赴いたという。一三三八年頃テルニに移り、数か月の間キリスト教を伝え、テルニの司教職確立以前の「原司教」(protoscovo)ともみなされている。皇帝ハドリアヌスにより投獄され、偶像崇拜を拒んだため皇帝により斬首された。殉教年月日は一四二年五月十六日とされる。<sup>(24)</sup>この伝承にはオークセルの同名聖人との混同が指摘される。元来この聖人はテルニとは無関係で、オークセル近くの地名をテルニと誤解したことからこの混同が生じたらしい。<sup>(25)</sup>ヴィーニの彫像では、司教帽を被り、両手で三階建てのバシリカ式聖堂の模型を抱え、足下には殉教聖人を示す棕櫚の枝が置かれる。聖堂の模型は、テルニの最初の霊的指導者として与えられたものである。<sup>(26)</sup>

《聖女アガベ》（図20）は、後述する聖女ドンニーナとともにテルニの殉教処女聖人とされるが、史実上は両聖女ともにアンティオキア教会に属し、テルニとは無関係と考えられている。<sup>(27)</sup>ヤコビツリによれば、アガベは後述する初代テルニ司教ウァレンティヌスの弟子で、ウァレンティヌスが創設した女性信心会に他の大勢の処女たちとともに加わり、キリスト教信仰に生きてとされる。師の没後、皇帝アウレ

リアヌスが派遣した総督レオンティオスにより、太綱で縛られ暗い牢獄に六日間幽閉されたのち、総督の面前で斬首刑に処されたという。殉教年月日は二七三年二月十五日である。五五〇年頃、聖女の遺骸の埋葬地に、後述するテルニ司教アナスタシウスが彼女に捧げる聖堂と、ベネディクト会修道院を建立したという。しかし一七四四年に皇帝フリードリヒ・バルバロッサの軍隊が修道院を荒廃させると、アガペの頭部はローマのサンティ・アポストロリ聖堂に移されたと伝えられる。<sup>(28)</sup>

ヴァーニの彫像は左足で宝物箱を踏み、右足下に棕櫚の葉を置き、合掌して左上方を向き、天を見つめている。フィレンツェの個人邸Aに現存する石膏習作(像高51cm、図20a-1)は完成作の身振りとアトリビュートをほぼそのまま先取りしている。宝物箱は蓋付きで、首飾りが手前にこぼれている(図20a-2)。台座正面にはSAGAPEという記銘がある。左足で宝物箱を踏みつける動作は、世俗の財産に執着しない態度を示し、聖女が財産をすべて売り払って貧者に与えたと伝えるヤコビツリの記述を想起させる。<sup>(29)</sup>

テルニの主要な守護聖人として知られる《聖ヴァレンティヌス》(図21)には、同じ二月十四日を命日とするローマとテルニの二人の同名聖人との混同が生じている。<sup>(30)</sup> ヤコビツリによれば、テルニ出身の同聖人は若い頃ローマに出て人文学と神学を学び、教皇聖エレウテレス(在位一七四一—一八九年)から助祭に任じられたのち、故国に戻り、初代テルニ司教となった。同地で聖職者と女性のための信心会をそれぞれ創設し、後者には前述した聖女アガペも加わったという。また二五五年に教皇コルネリウスが召集したローマ公会議に招かれると、

ローマの雄弁家であったアテネ人クラトンの一人息子ケレモネスの関節症を治癒し、一家をキリスト教に改宗させた後、総督プラキドゥスの命令で捕縛され、偶像崇拜を拒んで斬首されたという。殉教年月日は二七〇年二月十四日<sup>(31)</sup>で、聖人の遺骸は一六〇五年にテルニ大聖堂に移された。<sup>(32)</sup> 二月十四日が今日「ヴァレンタイン・デー」として恋人たちの日とみなされるのは、この聖人の事績とは関係がなく、チョーサーがこの日に鳥たちが自分の伴侶を選ぶ日だと伝えたことを起源と見なす説や、同種のローマの風習をキリスト教化したものだとする説などがある。<sup>(33)</sup>

習作には二つのヴァージョンが存在する。第一構想(像高52cm、個人邸B)(図21b-1、b-2)の台座正面にはVALENTINOという記銘が(図21b-3)、また台座右側面にはVIGNIという署名がある(図21b-4)。この習作像は杖を地面に垂直に立て、上端を左手で支えており、足下には半裸の幼児が腰を下ろす。この構想は完成作では採用されなかった。一方、右手で棕櫚の葉をもち、司教帽を被り、右側を向く点は完成作と共通する。ただし完成作では右上方を向き、天を仰ぎ見る姿で、頭部の上方への傾斜がいっそう強調されている。また衣服のドレパリーも両者は異なっている。これに対し第二構想(像高53cm、個人邸A)(図21a)では、頭部の角度、ドレパリーなど完成作により近い趣向に変わっている。ただし手首を欠いた右手は完成作よりずっと高い位置にあり、頭部もまっすぐ上方を仰いでいる。また完成作では棕櫚の葉をもつ右手が左手よりずっと下方の腰の位置に来るのに対し、第二構想では左手よりやや高い位置に来ている。

第一構想に見られる半裸の子供のモチーフは、ケレモネスの治癒

の奇跡をあらわしたとも考えられるが、伝承ではケレメネスは小さな子供とは記されていない<sup>34)</sup>。ことによると聖プロクロスの墓に埋葬された子供の遺骸が、死後数日経過していたにも拘わらず、聖人の遺骸に触れて復活したとヤコピッリの伝える奇跡譚<sup>35)</sup>が、ウァレンティヌスに誤って適用されたものかもしれない。

《聖アナスタシウス》(図22)は、ヤコピッリによれば、故国シリアから五一六年にイタリヤに赴き、教皇ホルミスタス(在位五一四—五二三年)によって二人一組でウンブリアやトスカーナに派遣された三百人のキリスト教徒の一人で、聖プロクロスとともにウンブリアに説教に派遣され、ゴート族のテオドリック大王(東ゴート王、在位五一—五二六年)が力添えをしていた異端のアリウス派を大勢改宗させたという。五四三年のテルニ司教聖プロクロスの殉教後、後任に叙せられると、ゴート族の王トティラ(東ゴート王、在位五四—五五二年)が荒廃させたテルニの町を再興させ、聖母被昇天を記念したバシリカ式聖堂を建立、同聖堂に自らの司教座を置いたとされる。またゴート族が荒廃させたテルニ郊外サン・ヴァレンティーノ聖堂を再建し、自邸に聖女アガペを記念する聖堂を建てたという。没年月日は五五三年八月十七日とされる<sup>36)</sup>。アナスタシウスの伝承は九世紀まで存在せず、八三九年または八四一年、ロタール一世(西ローマ皇帝、在位八四〇—八五五年)の時代に、聖人自身が一人の市民の前に出現して自らの遺骸を探させ、教皇衣を纏った遺骸が発見されたと伝えられる<sup>37)</sup>。

《聖アナスタシウス》習作(像高52cm、個人邸B)(図22b—1、b—2)は、司教帽を頭上に戴き、右手を上げて祝福し(指の一部は欠

損)、司教杖をもった左手で外衣の端を掴んでいる。台座正面にはANASTASIOという記銘が、また台座右側面にはVIGINIという署名がある(図22b—3)。完成作はちょうど隣の《聖ウァレンティヌス》を逆にしたような体勢をとるが、殉教聖人ではないため棕櫚はもたない。習作同様に司教帽を被るが、右手を胸に置き、左手で衣服の裾を持ち上げている。習作とは異なり杖をもたず、外衣の持ち方も全く異なっている。

《聖女ドンニーナ》(図23)は、ヤコピッリによればテルニに聖女アガペの親族として生まれ、彼女を手本として生きたという。第二代テルニ司教聖プロクロスを師とし、他の十人ほどの処女とともにテルニの郊外の修道院に隠棲したとされる。東ゴート王トティラは聖女とその仲間たちを連れ出し、異端のアリウス派への改宗を迫ったが、甘言も威嚇も通じなかったため、全員を鞭で打ったのち斬首刑に処したと伝えられる。またこれらの聖女たちの遺骸はテルニのサン・サルヴァトーレ聖堂に残されているという。殉教年月日はヤコピッリによれば五四六年四月十四日である<sup>38)</sup>。

ヴィーニの完成作は、右手に殉教の棕櫚をもち、左手を胸に置いて天を見つめている。殉教聖女らしい凶像だが、右脚の後ろに車輪が置かれている理由ははっきりしない。ヤコピッリは聖女の殉教について斬首刑を、『聖人行伝』(Acta Sanctorum)は火刑を挙げるもの<sup>39)</sup>、車輪には言及していない。

《聖プロクロス》(図24)については、ローマで皇帝ディオクレティアヌスの軍隊の士官を務めた兵士プロクロスと、ポローニヤの司教プロクロスとの混同が生じ、両聖人ともにポローニヤのサン・プローク

ロ聖堂の同一の墓廟に埋葬されている。後者は五四〇年にポローニヤ司教となり、二年後にゴート族により殉教しており、テルニの聖プロクロスと同一視されたのはこちらだと考えられる<sup>40)</sup>。ヤコビツリによれば、本聖人はシリアにいた三百人のキリスト教徒の一人で、テルニに移住し、司教聖ウアレレンティヌスにより聖職者に任ぜられ、ウアレレンティヌスの殉教後は後任として五三三年五月十五日に第二代テルニ司教となり、教皇聖ヨハネス二世に承認されたという。またテルニやナルニで説教をするうちに、異端派により投獄されたが、天使に解放され、スポレートに移住したという。その後、聖人の前に現れたキリストに、説教と異端の改宗のためポローニヤに行くよう命じられ、同地で数多くの奇跡を行い、大勢を改宗させたという。東ゴート王トティラはプロクロスを捉えさせ、硬い鎖で縛り、生きたまま皮を剥がせたのち、斬首刑に処したと伝えられる。没年月日は五四三年十二月一日である<sup>41)</sup>。

ヴィーニの聖人像は司教帽を被り、左手で殉教の棕櫚をもち、握手を求めるように上に向けた右掌を前方に差し出し、想像上の対話相手を見下ろしている。

《聖ガブリエーレ・デッラッドロラータ》(図25)、俗名フランチェスコ・ポッセンティは一八三八年三月一日にアッシジで生まれた。教皇庁の高官を務めた父とともにさまざまな赴任先を移り住み、一八四一年から五六年までスポレートに滞在する。その間イエズス会の神学校に通い、一八五六年九月六日、十八歳のときモッロヴァツレで御受難修道会修練士となり、同年九月二十一日に「ガブリエーレ・デッラッドロラータ」(悲しみの聖母のガブリエル)の名で聖職衣を

得た。一八五八年七月にピエヴェトリーナに隠棲して哲学を研究、翌年七月四日にアブルツツォ州イーゾラ・デル・グラン・サツソに移住して研究を続けた。一八六二年二月二十七日、わずか二十四歳で結核のため同地で没した。一九〇八年に列福、一九二〇年に列聖された<sup>42)</sup>。

習作(像高51cm、個人邸B)(図25b-1)は左足の横に髑髏があり、両手で書物を胸の位置に支え持ち、台座正面にはS GABRIELEという記銘が(図25b-2)、また台座右側面にはVIGNIという署名がある。これに対し完成作では、髑髏は右足の側に置かれている。両手で書物を支え持つ点は同様だが、習作で体軀に平行に押し当てるように持っていた書物を、完成作では体軀に斜めの角度で読んでいる。書物は聖人の学究を、髑髏はその早すぎる死を示すものであろう。習作、完成作ともに短髪で長い外衣を着ている。

テルニ大聖堂の八体の聖人像は、モンテカティーニ・テルメの擬人像よりも十年ほど後の制作である。この時期のヴィーニは、一九三五年に前述した《ネーラ河とヴェリーノ河》及びローマのラ・サピエンツァ大学のための諸作、とりわけ文学部と法学部のファサードを飾る巨大な高浮き彫り《カストルとポリュクス》を制作し、本聖人像とほぼ同時期にはボルツァアーノの全国社会保障機構会館ファサード浮彫《統帥讃歌》(一九三五―三七年)を制作するなど、モニュメンタルな作風に転じ、アンドレオッティの直接的影響はやや薄まっている。

## 結 語

本稿ではモンテカティーニ・テルメの四体の擬人像と、テルニ大聖



堂ファサード上の八体の聖人像を図像的に検討し、現存する習作とともに公刊した。前者は《泉》、《葉》、《衛生》、《豊饒》として表された「健康」を表し、アンドレオッティ風のエトルスク的造形表現の影響を受けながら成立させた。古典的志向の強い作風の一形態とみなされる。また後者はテルニ及びウンブリア州に因んだ八人の聖人像を表し、アンドレオッティの影響を脱しモニュメンタルな作風を追究し始めた時期の作例と考えられる。モンテカティーニ・テルメの四体の擬人像のうち二点、またテルニの八体の聖人像のうち四点に習作が現存し、それらを初めて紹介するとともに、完成作で放棄された構想についても検討した。またテルニに関しては当初の《被昇天の聖母》の計画や、先に四体が先行して設置された経緯についても概観した。

ヴィーニの公共彫刻の習作についての調査は本稿で終結し、以後は全公共彫刻のカタログ・レゾネ作成を進行させ、順次本誌上での刊行をめざしていく。

本研究は、平成二六年度文部科学省科学研究費助成(基盤研究(C))の成果の一部である。

#### 注

- (1) N. Kai, *Bozzetti inediti di Corrado Vigni, per Sabaudia e Bolzano*, 『五浦論叢』第十七号、二〇一〇年、(1)・(26)頁・甲斐教行「コッラード・ヴィーニ作ラグーサ郵政電信庁舎寓意像小論」、『五浦論叢』、第二十号、二〇一二年、一一二六頁。
- (2) モンテカティーニ・テルメの温泉場の歴史的概観は V. Santoianni, *Montecatini Terme*, Firenze 2000, pp.27-28 を参照。テッ

トゥッチョ浴場について pp.39-46.

- (3) G. Carocci, *Bagni e villeggiature in Toscana*, Firenze 1899, p.133; M.A. Giusti, *La città dei giardini, in Montecatini - città giardino delle Terme*, a cura di M.A. Giusti, Milano 2001, pp.11-109, in particolare p.11.
- (4) ジョヴァンノッソの経歴については C. Massi, *Montecatini Terme: l'invenzione della moderna città termale*, in AA. VV., *Montecatini città d'acque*, Firenze 2008, pp.109-110, n.80 を参照。
- (5) A. Lambertini, *Verso un nuovo paesaggio termale: il villaggio dell'acqua di Massimiliano Fuksas*, in AA. VV., *Montecatini città d'acque cit.*, p.153, fig.53.
- (6) *Le nuove costruzioni alle R. Terme di Montecatini*, "Architettura e arti decorative", ottobre 1923, pp.83-91, illus. a p.86.
- (7) *I nuovi edifici delle Regie Terme di Montecatini*, "L'ingegnere", giugno 1928, pp.344-355, illus. a p.346.
- (8) "Figure scolpite da Corrado Vigni, aggiunte nel 1936" (C. Massi, *op. cit.*, pp.71-111, in particolare p.98. この誤解は最新のモノグラフの中で踏襲されたこと。C. Massi, *Architettura e paesaggio a Montecatini - Itinerari metropolitanani nella città termale*, Firenze 2014, p.82.
- (9) 例えば二〇〇一年のモンテカティーニ・テルメに関する刊行物では「本文中で「泉・健康・美・豊饒に着想を得た寓意彫像」("sculture algoriche ispirate alla Fonte, alla Salute, alla Bellezza e all'Abbondanza") の記述を R. Giovannelli, *Un diporto ar-*

- istico in Valminiole, in *Montecatini – città giardino delle Terme cit.*, pp.111-215, in particolare p.134)。その後二〇〇六年に、ヴィーニの晩年の弟子であるフィオレンツォ・コッセルティニも「泉 健康 美 豊饒」(“Fonte, Salute, Bellezza, Abbondanza”)と同じ同様の記述を残している (F. Copertini, *Il risveglio: ricordo dello scultore Corrado Vigni*, “Erba d’Arno”, 103, 2006, pp.55-61, in particolare p.61)。一方、二〇〇二年の前掲書では各彫像の図版キャプションとして、左から「泉」「衛生」「薬」「豊饒の姿をよむ健康」と記載する (R. Giovannelli, *op. cit.*, illus. a pp.148-149)。また、一九九九年の刊行物では「薬 健康 衛生 豊饒をよむ表やれた泉」(“la Medicina, la Salute, l’igiene e la Sorgente raffigurata con l’Abbondanza”)と記されている (V. Ferretti, *Liberty e Terme di Montecatini*, ivi 1999, p.33)。
- (10) “La Source, la Médecine, l’Hygiène et la Santé” (Société Anonyme, Itineraries d’Italie, Florence, *Montecatini Thermana*, Florence 1929, p.9).
- (11) “partendo da sinistra, la Sorgente, la Medicina, l’igiene e la Salute” (V. Santoianni, *op. cit.*, p.42).
- (12) 甲斐教行、前掲「ロッラーダ・ヴィーニ作ラゲーサ郵政電信片 含寓意像小論」三頁。
- (13) 《ケレス》については以下の拙論を参照。N. Kai, *Corrado Vigni e l’intelligenza umana*, “Artista”, 2010, pp.142-149, in particolare pp.145, 147.
- (14) *Un’artistica Fontana a Terni in piazza del Duomo*, “La Tribuna”, 25 gennaio 1934 (illus.). この記事には設置予定の噴水彫刻が図版掲載されており、一五三四年にすべての制作は最終段階にあったことがわかる。
- (15) d. C. Romani, *Terni – La Cattedrale di S. Maria Assunta – 15 secoli di arte e di storia*, Terni s.a., p. non numerata [p.29].
- (16) ヴィーニの噴水および八体の彫像は近年 P. Maggiolini, *Terni società e arte*, 2, Todi (PG) 2013, pp.86-88 にカラー図版で紹介された。
- (17) *Le feste per l’inaugurazione dei lavori del Duomo*, “Messaggero – Roma”, 12 aprile 1934, edizione di provincia.
- (18) *La rinascita della Cattedrale di Terni*, “L’unione tunisi”, 27 aprile 1934 (illus.).
- (19) *Le solenni feste di Terni in onore del preziosissimo sangue di N. S. Gesù Cristo nel XIX secolo della Redenzione e per l’inaugurazione delle opere di restauro della Cattedrale con l’intervento di S. E. il cardinale Pietro Gasparri*, 22 aprile 1934, illus. a p.16 e p.26. 同誌 巻二二二二頁以下の学術会議議事録を参照。 *La Cattedrale di S. Maria Assunta in Terni*, a cura del “Convegno Culturale Maria Cristina di Savoia di Terni”, Atti delle giornate di studio (Terni 1993-1995), Terni 1998.
- (20) 古代末までのテルニの聖人に関する史実は以下を参照。F. Lanzoni, *Le diocesi d’Italia dalle origini al principio del secolo VII (an. 604)*, Faenza 1927, pp.404-417 (*Interamna Nahars (Terni)*); *Bibliotheca Sanctorum*, Romae 1961-1970, ad vocem; V. Saxer, *L’Umbria nel*

- Martirologio Gerominiano*, in *Umbria cristiana. Dalla diffusione del culto al culto dei santi (secc. IV-X)*, Atti del XV Congresso internazionale di studi sull'alto medioevo (Spoleto 2000), ivi 2001, pp.713-734, in particolare pp.716-718, 726-728; 聖カサレンティノススツゴツトチカドニヲ參照。p. E. Fuscuardi, *Studio critico illustrativo sul martire S. Valentino di Terni*, "Rassegna del Comune di Terni", 1935, 3-4, pp.7-18; 5-6, pp.13-21; 7-8, pp.8-14; *San Valentino patrono di Terni*, Atti del Convegno di studi (Terni 2004), a cura di Vincenzo Pirro, Arrone (Terni) 2009. 聖トナトマンノキソツゴツトチカドニヲ參照。C. Angelelli, S. Zampolini Faustini, *Sant'Anastasio tra fonti letterarie e indagini archeologiche*, in *San Valentino cit.*, pp.67-102; G. Cassio, *Tra martirio e pastorale: frammenti di memoria dei santi patroni di Terni nelle carte dell'Archivio storico diocesano*, in *San Valentino cit.*, pp.205-246, in particolare pp.214-220; 聖トロンロベゴツトチカドニヲ參照。p.220-222 參照。
- (21) F. Angeloni, *Historia di Terni*, Roma 1646; L. Iacobilli, *Vite de' santi, e beati dell'umbria, e di quelli, i corpi de' quali riposano in essa provincia*, Foligno 1647.
- (22) G. Cassio, *San Francesco, il santuario di Terni - visione incantevole di arte e fede*, Perugia 2005, p.294 に掲載。横幅彩色。
- (23) G. Cassio, *ivi*.
- (24) L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.505-507.
- (25) F. Lanzoni, *op. cit.*, p.406; *Bibliotheca Sanctorum*, 10, p.467.
- (26) 伝統的に大聖堂の再建者に擬せられる聖アナスタシウス(後述と混同された可能性も考えられる。
- (27) F. Lanzoni, *op. cit.*, pp.404-405; *Bibliotheca Sanctorum*, 1, col.301-302. テルニのサン・ヴァレンティーノ聖堂に由来する《カストゥラの石棺》(四〜五世紀)ヴァティカン美術館・カソポサント・テウトニコ)に刻まれたアガペとドンニーナの記録は、両聖女をテルニと結びつける根拠のひとつとなったが、記録が当初のものか、人名が殉教聖女を示すかをめぐっては異論が多い。p. E. Fuscuardi, *op. cit.*, 3-4, pp.16-17 e fig.5; 7-8, p.9; *Bibliotheca Sanctorum*, *ivi*; F. Bisconti, *Sarcofagi tardantichi e altomedievali in Umbria: diffusione, committenza e funzioni*, in *Umbria cristiana cit.*, pp.339-366, in particolare pp.356-358 e fig.38; V. Saxer, *op. cit.*, pp.727-728 參照。
- (28) L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.254-256.
- (29) L. Iacobilli, *op. cit.*, p.255.
- (30) A. Butler, *Il primo grande dizionario dei santi: second il calendario*, Casale Monferrato 2003, p.199.
- (31) L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.244-252.
- (32) *Bibliotheca Sanctorum*, 12, col.890.
- (33) A. Butler, *op. cit.*, p.199. 参考として註釋は、以下を參照。M. Schöplm, L. Seren, *San Valentino di Terni - storia tradizione devozione*, Moreno (Roma) 2000, pp.74-76.
- (34) L. Iacobilli, *op. cit.*, p.247.
- (35) L. Iacobilli, *op. cit.*, p.683.
- (36) L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.684-687.

- (57) Ivi, pp.685-686; F. Lanzoni, *op. cit.*, p.417; *Bibliotheca Sanctorum*, 1, col.1063-1064.
- (58) L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.405-406.
- (59) *Acta Sanctorum*, Aprilis, II, Antverpiae 1675, pp.211-212; “cum sociis ignibus, loco Virginibus coronata” (ivi, p.212).
- (60) A. Butler, *op. cit.*, p.549. 乃一ノ参照。 F. Lanzoni, *op. cit.*, pp. 413-414.
- (61) L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.681-683.
- (62) *Bibliotheca Sanctorum*, 5, col.1336-1339.
- 図説并載 (Referenze fotografiche)
- 1 (A. Lambertini, *Verso un nuovo paesaggio termale: il villaggio dell'acqua di Massimiliano Fuksas*, in AA. VV., *Montecatini città d'acqua* cit., p.153, fig.53)
- 2 (*Le nuove costruzioni alle R. Terme di Montecatini*, “Architettura e arti decorative”, ottobre 1923, pp.83-91, illus. a p.86)
- 3, 4-1, 4b, 4c, 5-1, 6-1, 7-1, 7a, 7c, 12, 13, 14, 15, 18-25 (Autore)
- 4-2, 5-2, 6-2, 7-2 (*Montecatini – città giardino delle Terme*, a cura di M.A. Giusti, Milano 2001)
- 8 (*Scultura di Corrado Vigni – XXI tavole e prefazione di Italo Tavolato*, Milano 1934)
- 9 (*Medardo Rosso – catalogo ragionato della scultura*, a cura di Paola Mola, Fabio Vittucci, Milano 2009)
- 10 (Archivio Giovannardi, Firenze)
- 11 (*Libero Andreotti*, cat. della mostra (Matera 1998), Santeramo 1998)
- 16, 17 (*Le solenni feste di Terni in onore del preziosissimo sangue di N. S. Gesù Cristo nel XIX secolo della Redenzione e per l'inaugurazione delle opere di restauro della Cattedrale con l'intervento di S. E. il cardinale Pietro Gasparri*, 22 aprile 1934)
- [かい のりゆき／所員・本学教育学部教授]

<sup>21</sup> Per la leggenda di san Procolo, vedi L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.681-683.

<sup>22</sup> *Bibliotheca Sanctorum*, 5, col.1336-1339.

<sup>23</sup> Per questo bassorilievo vedi N. Kai, *Bozzetti inediti di Corrado Vigni, per Sabaudia e Bolzano*, “The Izura Bulletin”, 17, 2010, pp.(1)-(26), in particolare pp.(4)-(6), (8), (10)-(12), (17)-(26).

[Noriyuki Kai / Ordinario di Storia dell'Arte Occidentale, Ibaraki University]

- <sup>2</sup> A. Lambertini, *Verso un nuovo paesaggio termale: il villaggio dell'acqua di Massimiliano Fuksas*, in AA. VV., *Montecatini città d'acque* cit., p.153, fig.53.
- <sup>3</sup> *Le nuove costruzioni alle R. Terme di Montecatini*, "Architettura e arti decorative", ottobre 1923, pp.83-91, illus. a p.86.
- <sup>4</sup> Quindi non è corretta l'indicazione secondo la quale le statue di Vigni sarebbero state "aggiunte nel 1936" (C. Massi, *op. cit.*, pp.71-111, in particolare p.98).
- <sup>5</sup> "La Source, la Médecine, l'Hygiène et la Santé" (Société Anonyme, Itineraries d'Italie, *Montecatini Thermae*, Florence 1929, p.9); "partendo da sinistra, la Sorgente, la Medicina, l'Igiene e la Salute" (V. Santoianni, *op. cit.*, Firenze 2000, p.42); "la Medicina, la Salute, l'Igiene e la Sorgente raffigurata con l'Abbondanza" (V. Ferretti, *Liberty e Terme di Montecatini*, ivi 1999, p.33).
- <sup>6</sup> Sulle case private che abbiamo qui definito A e B, vedi N. Kai, *Per Corrado Vigni – statue allegoriche del Palazzo delle Poste e telegrafi di Ragusa*, "The Izura Bulletin", 20, 2013, pp.1-36, in particolare p.34.
- <sup>7</sup> Per questa medaglia, vedi N. Kai, *Corrado Vigni e l'intelligenza umana*, "Artista", 2010, pp.142-149, in particolare pp.145, 147.
- <sup>8</sup> Vedi *Un'artistica Fontana a Terni in piazza del Duomo*, "La Tribuna", 25 gennaio 1934 (illus.), ove è stato già riprodotto il gruppo con *Il Nera e il Velino*, per cui si sa che nel 1534 l'opera era già nell'ultima fase.
- <sup>9</sup> d. C. Romani, *Terni – La Cattedrale di S. Maria Assunta – 15 secoli di arte e di storia*, Terni s.a., p. non numerata [p.29]. Tutte le statue di Vigni per Terni sono state recentemente riprodotte a colori in P. Maggiolini, *Terni società e arte*, 2, Todi (PG) 2013, pp.86-88.
- <sup>10</sup> *Le feste per l'inaugurazione dei lavori del Duomo*, "Messaggero – Roma", 12 aprile 1934, edizione di provincia.
- <sup>11</sup> *La rinascita della Cattedrale di Terni*, "L'unione tunisi", 27 aprile 1934 (illus.); *Le solenni feste di Terni in onore del preziosissimo sangue di N. S. Gesù Cristo nel XIX secolo della Redenzione e per l'inaugurazione delle opere di restauro della Cattedrale con l'intervento di S. E. il cardinale Pietro Gasparri*, 22 aprile 1934, illus. a p.16 e p.26. Per la Cattedrale di Terni, vedi inoltre: *La Cattedrale di S. Maria Assunta in Terni*, a cura del "Convegno Culturale Maria Cristina di Savoia di Terni", Atti delle giornate di studio (Terni 1993-1995), Terni 1998.
- <sup>12</sup> Per la ricostruzione storica delle vite dei santi ternani, vedi per esempio F. Lanzoni, *Le diocesi d'Italia dalle origini al principio del secolo VII (an.604)*, Faenza 1927, pp.404-417 (*Interamna Nahars (Terni)*); *Bibliotheca Sanctorm*, ad vocem; V. Saxer, *L'Umbria nel Martirologio Geronimiano*, in *Umbria cristiana. Dalla diffusione del culto al culto dei santi (secc.IV-X)*, Atti del XV Congresso internazionale di studi sull'alto medioevo (Spoleto 2000), ivi 2001, pp.713-734, in particolare pp.716-718, 726-728; per san Valentino, vedi anche p. E. Fuscuardi, *Studio critico illustrativo sul martire S. Valentino di Terni*, "Rassegna del Comune di Terni", 1935, 3-4, pp.7-18; 5-6, pp.13-21; 7-8, pp.8-14; *San Valentino patrono di Terni*, Atti del Convegno di studi (Terni 2004), a cura di Vincenzo Pirro, Arrone (Terni) 2009. Per sant'Anastasio vedi C. Angelelli, S. Zampolini Faustini, *Sant'Anastasio tra fonti letterarie e indagini archeologiche*, in *San Valentino* cit., pp.67-102; G. Cassio, *Tra martirio e pastorale: frammenti di memoria dei santi patroni di Terni nelle carte dell'Archivio storico diocesano*, in *San Valentino* cit., pp.205-246, in particolare pp.214-220; per san Procolo vedi *ivi*, pp.220-222.
- <sup>13</sup> G. Cassio, *San Francesco, il santuario di Terni – visione incantevole di arte e fede*, Perugia 2005, p.294.
- <sup>14</sup> Per la leggenda di san Pellegrino, ho consultato, tra l'altro, L. Iacobilli, *Vite de' santi, e beati dell'umbria, e di quelli, i corpi de' quali riposano in essa provincia*, t.1, Foligno 1647, pp.505-507.
- <sup>15</sup> Per la leggenda di sant'Agape, vedi L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.254-256. Su questo episodio in particolare, vedi *ivi*, p.255.
- <sup>16</sup> Per la leggenda di san Valentino, vedi *ivi*, pp.244-252.
- <sup>17</sup> Questo motivo potrebbe riferirsi alla guarigione dello storpio Cheremone, figlio dell'oratore Cratone, operata da san Valentino, anche se la leggenda non dice che Ceremone era un fanciullo (L. Iacobilli, *op. cit.*, p.247). L'episodio del fanciullo risorto, dopo esser sepolto nella stessa tomba di san Procolo, potrebbe essere attribuito erroneamente a san Valentino. (L. Iacobilli, *op. cit.*, p.683).
- <sup>18</sup> Per la leggenda di sant'Anastasio, vedi L. Iacobilli, *op. cit.*, pp.684-687.
- <sup>19</sup> Per la leggenda di santa Donnina, vedi *ivi*, pp.405-406.
- <sup>20</sup> *Acta Sanctorum*, Aprilis, II, Antverpiae 1675, pp.211-212; "cum sociis ignibus, loco Virginibus coronata" (*ivi*, p.212).

l'iscrizione "S ANASTASIO" e la firma "VIGNI" sul fronte e il lato del basamento (fig.22b-3); benedice con la mano destra (ove manca un'indice) mentre tiene, con l'altra mano, il bordo del vestito insieme al bastone vescovile.

*Santa Donnina* (fig.23), parente di Agape e allieva di Procolo, secondo la leggenda, guarda il cielo con la mano sinistra al petto e tiene una palma del martirio nell'altra mano; non ci è per ora noto il motivo della presenza di una ruota dietro alla gamba destra, giacché la santa, secondo Iacobilli, sarebbe stata decapitata da Totila, Re di Goti, nell'anno 546<sup>19</sup> (*Acta Sanctorum*, invece, si riferiscono al rogo<sup>20</sup>).

*San Procolo* (fig.24), il secondo vescovo di Terni dopo Valentino, con un cappello vescovile, tende la mano destra in avanti, mentre tiene con l'altra mano una palma del martirio, giacché egli sarebbe stato decapitato dal Re Totila, nell'anno 543<sup>21</sup>.

*San Gabriele dell'Addolorata* (fig.25), nato ad Assisi nel 1838 col nome secolare Francesco Possenti, abitava a Spoleto dal 1841 al 1856, ove frequentava il Collegio dei gesuiti, e vesti l'abito religioso nel 1856. Dopo un ritiro a Pievetorina per gli studi filosofici, si trasferì per ragioni di studio all'Isola del Gran Sasso in Abruzzo, ove moriva di tubercolosi nel 1862, a soli ventiquattro anni. Fu beatificato nel 1908 e santificato nel 1920<sup>22</sup>. La figura scolpita da Vigni legge un libro aperto in riferimento alla sua passione per gli studi, accompagnato da un teschio ai piedi per indicare la sua morte prematura. Ne esiste un bozzetto in gesso (fig.25 b-1) (casa B), alto 51 cm e recante l'iscrizione "S GABRIELE" (fig.25 b-2) e la firma "VIGNI" sul fronte e il lato del basamento, accompagnato dagli stessi attributi, pur con alcune varianti.

Le statue di Terni sono eseguite negli anni 1934-37, un decennio dopo quelle di Montecatini Terme, periodo in cui Vigni affrontava i *Dioscuri*, grande altorilievo per la facciata delle facoltà di Lettere e di Giurisprudenza della Sapienza romana, nel 1935, e *Inno al Duce*, bassorilievo lungo 1230 cm, per la facciata del palazzo dell'INPS a Bolzano, nel 1935-37<sup>23</sup>, ove riconosciamo lo stile classicheggiante e monumentale, ormai lontano dall'influsso di Andreotti.

*Ringrazio vivamente Lucia Mannini per la collaborazione nella stesura in italiano, don Carlo Romani e il dottor Giuseppe Cassio per la segnalazione bibliografica sulla Cattedrale di Terni, e per avermi gentilmente reso possibile osservare da vicino le statue di Vigni.*

## Note

<sup>1</sup> Per la carriera di Ugo Giovannozzi, vedi C. Massi, *Montecatini Terme: l'invenzione della moderna città termale*, in AA. VV., *Montecatini città d'acque*, Firenze 2008, pp.109-110, nota 80; per la storia delle terme di Montecatini Terme, vedi V. Santoianni, *Montecatini Terme*, Firenze 2000, pp.27-28; per lo stabilimento "Tettuccio", vedi *ivi*, pp.39-46.

il fiume dal proprio vaso. Di fronte alla fontana, poi, sulla terrazza sovrastante la facciata del Cattedrale, ricostruita su progetto di Gaetano Coppoli nel 1934-37 dopo i danni subiti con il terremoto del 1917, Vigni ha collocato otto statue di santi ternani e umbri (fig.15)<sup>9</sup>. Nell'aprile del 1934 si pensava ancora alla statua di *Maria Assunta* – mai realizzata – che avrebbe dovuto esser collocata in cima al timpano, della quale aveva eseguito un bozzetto (fig.16)<sup>10</sup>. Il 22 aprile venivano inaugurate, per mancanza di fondi, soltanto le quattro statue dei santi: da sinistra, Agape, Valentino, Anastasio e Gabriele dell'Addolorata (fig.17)<sup>11</sup>. Entro il 1937 vennero aggiunte altre quattro – Francesco d'Assisi, Pellegrino, Donnina, Procolo – mentre Agape veniva spostata nella collocazione attuale, più in centro.

Osserviamo l'iconografia delle statue nell'ordine attuale, da sinistra<sup>12</sup>.

*San Francesco d'Assisi* (fig.18), in abito del suo ordine, porta una grande croce, con una mano al petto; della statua esiste una fotografia storica, firmata da Vigni e datata 1935<sup>13</sup>.

*San Pellegrino* (fig.19), così detto “protovescovo” di Terni, indossa un cappello vescovile, e tiene un modello della Cattedrale come primo maestro spirituale di Terni; ai suoi piedi è una palma del martirio, giacché egli sarebbe stato decapitato dall'Imperatore Adriano nell'anno 142<sup>14</sup>.

*Sant'Agape* (fig.20), leggendaria allieva di Valentino, guarda il cielo con le mani giunte e calpesta una cassaforte di tesori, per indicare la sua preferenza accordata al valore spirituale su quello materiale, allusione all'episodio in cui aveva venduto tutti i suoi beni per far l'elemosina ai poveri<sup>15</sup>; ai suoi piedi è la palma del martirio, giacché sarebbe stata decapitata nell'anno 273. Della statua esiste un bozzetto in gesso (fig.20a-1, a-2) (casa A), alto 51 cm, che prevede tutti i gesti e gli attributi della versione definitiva, con l'iscrizione “S AGAPE” sul basamento.

*San Valentino* (fig.21), il primo vescovo di Terni, indossa un cappello vescovile e guarda il cielo; in mano ha una palma del martirio, giacché sarebbe stato decapitato nell'anno 270<sup>16</sup>. Della statua esistono due bozzetti in gesso che corrispondono a due fasi dell'ideazione. Quello della prima idea in gesso (fig.21 b-1, b-2) (casa B), alto 52 cm e recante l'iscrizione “VALENTINO” e la firma “VIGNI” sul fronte e il lato del basamento (fig.21b-3, b-4), oltre al cappello vescovile e alla palma, tiene un bastone, mentre un bambino seminudo è seduto ai suoi piedi, forse allusione a un suo miracolo<sup>17</sup>; quello della seconda idea (fig.21a) (casa A), alto 53 cm, è più vicino alla versione definitiva, pur differenziandosi nella posizione delle mani e nella direzione della testa.

*Sant'Anastasio* (fig.22), il terzo vescovo di Terni dopo Procolo<sup>18</sup>, con un cappello vescovile, guarda il cielo con la mano destra al petto, tenendo una parte del vestito con l'altra mano; della statua esiste un bozzetto in gesso (fig.22 b-1, b-2) (casa B), alto 52 cm e recante



## Le sculture pubbliche di Corrado Vigni, per Montecatini Terme e Terni

In questa sede descriviamo brevemente le sculture di Corrado Vigni per due città: Montecatini Terme e Terni.

\*

Lo stabilimento Tettuccio di Montecatini Terme è stato costruito tra il 1923 e il 1927 - per essere inaugurato nel 1928 - su progetto di Ugo Giovannozzi<sup>1</sup>, architetto e ingegnere fiorentino, direttore dell'Ufficio tecnico della Società Anonima Esercente Le Regie e Le Nuove Terme, ente che allora governava tutte le terme della città. Bloccato il primo progetto nel 1916 a causa della prima guerra mondiale, nel disegno modificato nel 1918 sono riconoscibili quattro statue sugli architravi sovrastanti le colonne che circondano l'entrata (fig.1)<sup>2</sup>, e ugualmente nel progetto pubblicato nel 1923 (fig.2)<sup>3</sup>, ma in entrambi i disegni i gesti delle statue sono differenti da come saranno eseguiti poi dallo scultore fiorentino Corrado Vigni (fig.3). Nella fotografia pubblicata nel giugno 1928 le quattro statue di Vigni si trovano come nell'attuale ordine, partendo da sinistra<sup>4</sup>: *la Sorgente*, *la Medicina*, *l'Igiene* e *la Salute in veste di Abbondanza*<sup>5</sup>.

Del *La Sorgente* (fig.4) che versa l'acqua con un'anfora, esiste in una collezione fiorentina (casa B<sup>6</sup>) un bozzetto in gesso (fig.4b), alto 133 cm, purtroppo danneggiato a causa della sua collocazione esterna. Ne esiste anche una fotografia storica (fig.4c). *La Medicina* (fig.5) tiene una ciotola con la mano destra e una pianta medicinale con la sinistra. *L'Igiene* (fig.6) ha un cartiglio senza scritta, e *la Salute* (fig.7), in veste di Abbondanza, ha un cestello di fiori e frutti. Di quest'ultima statua esiste in un'altra collezione fiorentina (casa A) un bozzetto in gesso, alto 31 cm, che ha perduto la testa, il braccio destro e le punte dei piedi (fig.7a). Di questa ci è inoltre giunta una fotografia storica (fig.7c).

Corrado Vigni, partendo da uno stile vicino a quello di Medardo Rosso, riconoscibile nelle sue prime quattro *maschere* (fig.8; cfr. fig.9), eseguite nel 1911-12, si accostava poi al linguaggio di Libero Andreotti, come si vede nei due bassorilievi mitologici (fig.10; cfr.11) per il teatro del Dopolavoro ferroviario a Roma, eseguiti prima del 1925 ma perduti dopo la guerra, ed anche nella *Cerere* (fig.12), medaglia commemorativa per il venticinquesimo anno dell'Hotel Baglioni di Firenze, eseguita nel 1928<sup>7</sup>, anno dell'inaugurazione delle quattro statue per il Tettuccio.

\*

Per Terni, Vigni esegue nel 1935 una fontana per la piazza del Duomo, con le statue personificate di due fiumi, *Il Nera e il Velino*, (fig.13)<sup>8</sup>. *Il Nera* (fig.14-2) tiene una tazza ove riceve l'acqua dal *Velino* (fig.14-1), che la versa da un vaso, mentre fa scorrere a sua volta